石神台の石・ロマン

これは「石神台の石」に始まる話です。

20 年余りまえ、石神台の南の崖の上に越してきたときの事です。崖下の段状の一角に、直径 1m ほどの大石を見つけました。それも二つです。一つは大きな丸い岩が二つに割れたようなテーブル状の石で、いま一つは土の中から 10cm ほど、丸い面の頭が出ていました。この石は全体の大きさは不明です。画像のレンガで囲まれた所が頭の部分で、表面に文字とも傷とも判定できないものがあるので、風化させないよう土をかぶせてあります。画像のテーブル状の石は崖に沿って立て掛けてありました。今は移設してレンガの向こうにあります。

石の意味が分からないまま 10 年ほどが過ぎ、定年で時間に余裕ができ大磯町国府の風水を調べている中で、発見がありました。この写真の位置から向こうの森の中に見える、六所神社の神殿の妻側の三角形が正面に見えたのです。確かに神殿の真横がこの石の方角に向いています。このことから、六所神社は小さな国府平野の中心に位置し、風水でいう北の玄武が鷹取山で西の白虎がこの石の方角にあたる、西を指す目印の石と考えました。ところが地図で位置関係を確認すると、鷹取山は六所神社の真北には当たらず、6 度ほど時計回りに振れていました。ということは西も 6 度ずれていたのですが、その先に富士山があったのです。六所神社は北の玄武を鷹取山、西の白虎を富士山とする交点においた神社だったのです。

埋められていた石はまさしく神社の白虎方角を表す神石です。石神台の石神はこの白虎石が由来と思われます。テーブル状の石は埋められた白虎石が、長い年月で完全に埋もれて分からなくなることを懸念し、目印として崖に立てかけたものと推測しました。

話はここから新しい展開を見せます。

玄武にあたる鷹取山を、さらに調べることにしました。早速、山頂を訪ねても社があるのみで新しい発見は何もありませんでした。そんな中、若いころ丹沢の山々を登っていて、ところどころに同じ読みの「高取山」が見つかり不思議に思ったことを思い出したのです。

そこで神奈川県の地図や、丹沢の拡大図から「鷹取山」と「高取山」を採取してみました。表１のように神奈川県にそれぞれ三山ずつ見つかりました。

表１　神奈川県のたかとり山

記号	山名	標高 m	所在地付近の地名
A1	高取山	556	神奈川県伊勢原市三ノ宮
B1	高取山	522	神奈川県厚木市飯山
C1	高取山	705	神奈川県愛甲郡清川村宮ヶ瀬
A2	鷹取山	219	神奈川県大磯町生沢
B2	鷹取山	139	神奈川県横須賀市湘南鷹取３
C2	鷹取山	472	神奈川県相模原市藤野町小渕

地図にプロットすると図１のようになります。丹沢山塊の東と南に高取山、これと対になるように三方に鷹取山があることが分かりました。それぞれに記号を振っています。

驚くのは横須賀のB2鷹取山と大磯のA2鷹取山を結んだ先が富士山につながっていたことです。偶然ではこうはならないので、人の意思があることを知ります。富士山に対する強い思い入れが見えてきます。

またB1高取山からB2鷹取山を結んだ先に走水（はしりみず）が見つかります。さらに走水から富士山を結ぶと中間で六所神社と、先述の石神台の石を通過させていることが分かりました。ここまでくると、日本武尊（やまとたけるのみこと）東征の際に名付けた「たかとり山」と見えてきます。走水は日本武尊東征で、東京湾を渡る際の船出の場所だったところと日本書紀は記しています。富士山に対する強い思い入れは日本武尊の思いなのでしょう。

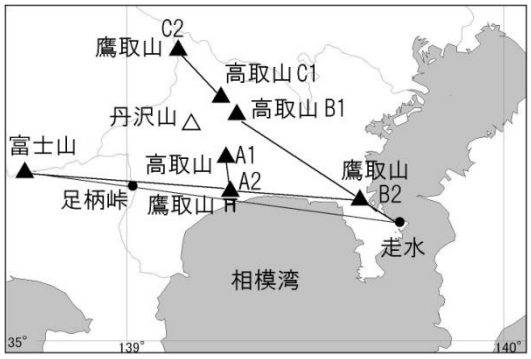

図１　神奈川県の高(鷹)取山

三つの対は日本武尊東征隊が進んだ方角を表す、ベクトル（矢印）と考えました。高の文字を鷹に変えて矢印の矢先としたのでしょう。伊勢原市三ノ宮の高取山から大磯の鷹取山に向くベクトルA1→A2は伊勢原市三宮から大磯に進んだ記録でしょう。鷹取山山中に日本武尊が立ったという大きな立石が見つかります。越冬のためにやってきたと思われます。

往時、国府祭（こうのまち）に参加する三宮の神輿は、野山や田んぼの中も直進し神揃山に７日かけてやってきたと伝わるが、このベクトルに従って進んだ東征隊の行動を祭りとして残したものと思えてきます。今も国府祭に参加する三宮の神輿は、当日早朝に出発し、金目で金目川の川に入り気勢を上げてやってきます。

ベクトル B1→B2 は、大磯で越冬した隊が平塚に出て厚木に向かい、このベクトルのように海老名で相模川を渡り三浦半島に進んだことを記録したものです。途上には日本武尊が腰かけたと伝える腰掛石や日本武尊を祀る小動（こゆるぎ）神社が二社見つかります。ロングビーチの浜を、「こゆるぎの浜」と称するのも日本武尊越冬と関係があるのでしょう。

今一度、六所神社について考えてみます。神社が走水と富士山を繋ぐ線上に位置する事実は、日本武尊東征隊が越冬した際か、その後に石神台の山頂にあった祠の柳田大神を、今の位置に遷したことが分かります。

三次元地図のカシミール３D で調べると、この線上を太陽が通過するのは４月８日と９月４日と分かりました。六所神社の秋の祭りは、祭神・櫛稲田媛に由来する「櫛まつり」ですが、この櫛は奇（く）しを意味し９月４日（クシ）とも何らかの関係があるのでしょう。

問題は日本武尊東征隊が走水から東京湾を渡った日です。渡海の最中に春の嵐に遭遇し、妃の弟橘媛は渡海の成功を願って荒海に身を投げてしまったのです。古事記にも日本書紀にも、その悲劇の日については記していません。日本武尊は北に流され富津岬を越え木更津（きさらづ）の浜に無事上陸できました。しかし最愛の妃を亡くした衝撃はおおきく、いつまでもその浜を去らなかった伝わり、「君去らづ」から木更津になったといわれます。

弟橘媛が詠った辞世、「さねさし　相武（さがむ）の小野に　燃ゆる火の　火中に立ちて　問ひし君はも」は、その和歌の中に媛が日本武尊東征の足手まといと認識していたことが、読み取れてきます。

弟橘媛の待女の一人が流れ着いて、息を吹き返していたことが伝わります。後に蘇我（そが）氏が当地にやってきているので、「我、蘇り（よみがえり）」と名を変えた蘇我氏の前身の出の女性と考えます。この時の奇跡が後の蘇我氏の隆盛へとつながったのでしょう。

富士山への思い入れの強い日本武尊は、太陽がこの富士山につながる直線の上を通過する４月８日に、東京湾を渡ったと考えました。走水からは富士山が見えないが、房総半島からは見えます。そこで直線の先の上総（かずさ）港に上陸し富士山に沈む太陽、今でいうダイアモンド富士を見る計画だったと考えます。そのため嵐の気配があったにかかわらず無理して出港し悲劇となったのでしょう。

図３　上総港、４月８日の日没

日本武尊は東征帰還の経路に、沢山の吾妻山を残しています。図 4 のように福島の吾妻山連峰に始まり二宮駅の近くにもあるので、弟橘媛と過ごした一冬を想い起こしたいと帰路に立ち寄った時の名付けと考えます。帰路の最後には「四阿屋（あずまや)」「吾妻耶」と文字を変えてまで媛に何度も呼び掛けているところが、切なく思います。

図 4　帰還経路の吾妻山

話はここから全国展開していきます。

神奈川県の高取山・鷹取山にいついては、少し見えてきました。そこで全国の高取山・鷹取山を調べてみました。地図にプロットすると図 5 のようになりました。

19 対のベクトルを発見しました。奈良県五條市の L1 高取山のみに対の鷹取山が見つかりませんでした。その謎は後に解けています。神奈川県と九州は特別に集中していることが分かりました。

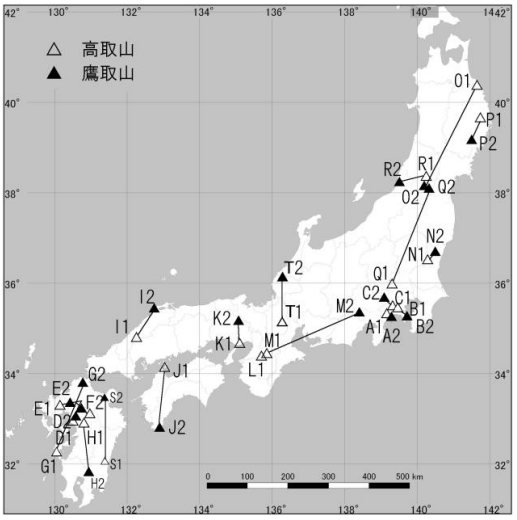

図 5　全国の高(鷹)取山

日本武尊東征は奈良を出発しているので、奈良より東は T1→T2 を除いたベクトルが日本武尊東征隊の進んだ経路を表現していました。奈良より西のベクトルは神武(じんむ)東征の経路を記録したベクトルです。山陰・四国・丹波に遠征があったことを記録しています。九州で見つかったベクトルは図 6 に拡大掲示しました。神武東征に向けた九州島内の動きが分かります。どんな動きだったか推理してみてください。邪馬台国近畿説では説明できません。

ベクトル T1→T2 は、神武東征後に東国開拓のための移住作戦を行ったことを記録した、たった一つの出発のベクトル記録です。

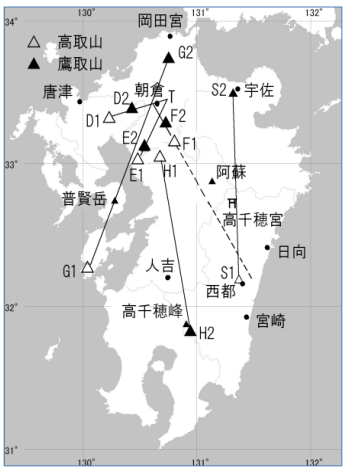

図 6　九州の高(鷹)取山

大変な発見となり、この後の 10 年余りはこれの研究や現地調査の時間となりました。

神武東征と日本武尊東征には約 100 年の時差があるが、同じ「たかとり山」のベクトルを用いているので、二つの東征は一連の建国の事業と認識していたことが分かります。文字の不自由な時代だったためこのような方法を用いたのでしょう。

しかも高取山・鷹取山の記録は記録の第 1 層で、第 2 層は高尾山です。さらに高城山、高塚山、高倉山、権現山、〇尾山、〇倉山といった同名・同種の山で、神武東征を構成する部隊ごとの経路や、東征途次の出来事などを記録していました。もちろん神武東征前の倭国の都（邪馬台国）も記録されていました。それでも解明できたことは記録の一部と思われ、残る沢山の同名同種の山の解明は手つかずのままです。

日本武尊ロマンに絞り話を続けます。話が長いと思った方は飛ばしてください。

日本武尊東征は、日高見（現在の北上）あるいは久慈あたりまで進んで引き返したとする考えが大方であるが、山に託した記録を見ていくと 4 人の副将軍と力を合わせ東国を隈なく遠征していたことが分かりました。

4 人の副将軍とは吉備武彦、大伴武日、穂積忍山宿彌、建稲種です。それぞれの概略の遠征を案内します。

吉備武彦は娘が日本武尊の妃の一人なので、東征に参加する理由があります。日本書紀によれば吉備武彦は、信濃で日本武尊と分かれ越の国に向かったとあるが、高尾山に記録された行程は相模で日本武尊と分かれた記録なので、先のベクトル C1→C2 が該当すると考えます。工程は図 7 です。

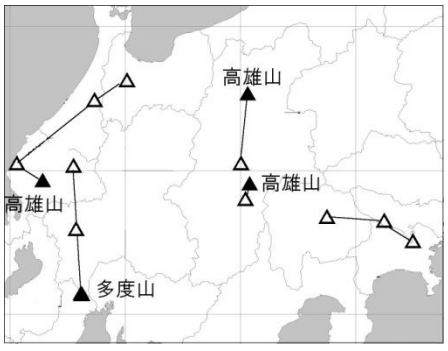

図 7　北陸遠征の経路

△は高尾山で横浜、八王子、山梨と進んでいます。諏訪の杖突峠を越えて高遠に南下して、伊那から北上した経路です。尾を雄に変えベクトルの矢先としています。長岡あたりまで進み、糸魚川ではヒスイの産地を探索しています。富山県で経路の空きが生じているのは、越冬のため一旦岐阜の高山に進み美濃で冬を越したためです。急流の神通川は遡れないので、有峰林道をよじ登っています。春になって白川経由で富山に戻ってきています。

加賀では白山に登った経路を〇尾山で残していました。後に山頂付近から銅鏡が発掘されています。東征隊は、山頂で地域の安寧を祈ったか水利権を意識して各地随一の山

に登る方針だったと思われます。

越前からは大野に進み温見峠を越えて美濃に出ています。

後に越前出身の継体天皇が越えた峠と同じです。その後関ケ原付近で越冬し翌春、伊吹山に向かった日本武尊と再会しています。

図８　関東の経路

次の大伴武彦は軍事に秀でていて、この東征に抜擢されたのでしょう。

大伴武日も海老名で日本武尊と分かれ、先のベクトルのQ1→Q2 のように関東平野を北上しています。日本武尊は東京湾を渡ると、房総半島を北上し、茨城に入り久慈に向かっています。従って大伴武日は主に西関東から福島県を経て仙台平野に入ります。関東平野は広く隈なく回るのは大変な行程です。伝説や山名・地名などから推理した経路は次のようになりました。図８です。

１、海老名→八王子→日の出町→日の出山→御岳山→所沢→飯能→毛呂山→

２、熊谷付近で荒川を渡る→さきたま古墳群→大宮台地を南下→浦和

３、岩槻大地を北上→幸手→栃木市→足尾→日光→那須→福島→国見

４、大河原付近での越冬準備隊を残し南下→小野→いわき

５、いわき→相馬→亘理→大河原・村田町付近で日本武尊隊とともに越冬。

大河原付近は蔵王の山影で降雪が少ないため、越冬地に選ばれたと思われます。

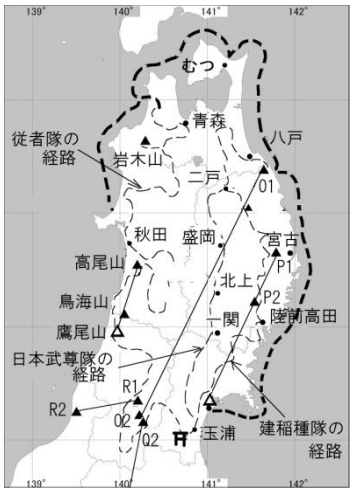

図９　東北の経路

日本武尊隊の経路概略です。副将軍の穂積忍山宿彌、船隊を率いる建稲種とともに北上しています。穂積忍山宿彌は東京湾の渡りで亡くなった弟橘媛の父で、娘を亡くした悲しみとともに遠征を続けていました。

利根川の渡りの際に、香取神宮と鹿島神宮を残したと考えています。香取は「たかとり」の「た」を抜いて鹿島と対にしたものと考えました。福島の浜通りは大伴隊が北上したので、日立から船で松島まで進んでいます。

松島からは縄文人の国津神・島津神の案内で、三陸沖を船で八戸に向かっています。

八戸で穂積忍山宿禰は日本武尊隊と分かれ下北半島から津軽半島に上陸しています。津軽平野・大館などを経て、降雪の少ない男鹿半島で越冬した後、翌年、横手盆地を巡り山形の庄内平野で日本武尊と再会しています。

日本武尊は八戸から盛岡に進み北上川沿いに南下し蔵王の東麓の大河原で越冬しています。ベクトル 01→02 です。船を降りた副将軍の建稲種は途中、二戸付近で分かれ北上山地の山の中を陸前高田まで南下しています。ベクトル P1→P2 でこの二つのベクトルは平行に設定してあります。日本武尊に戦いが生じれば、駈け付ける体制です。

翌春、山形に進み一旦米沢に南下し、最上川に沿って北上しました。置賜(おきたま)では大伴武日を野川流域の開墾のために残しています。日本武尊隊は戸沢村からは芭蕉と同じく最上川を舟で下ったという伝承が残ります。鳥海山の南の麓で穂積隊と合流し帰還の経路に入ります。

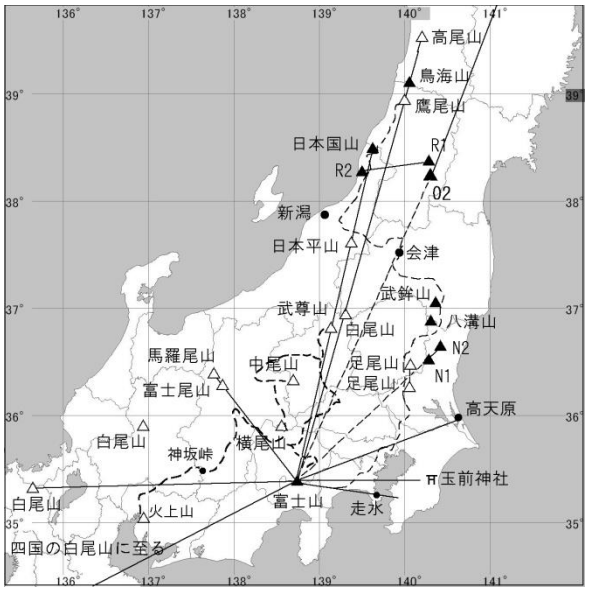

図 10　帰還の経路

帰還の最大の仕事は、日本国という新しい国名の認識を残すことでした。駿河の日本平に登り、富士山こそ「日本真中（ひのもとまなか)」と認識し国名を日本とする考えに至りました。そこで倭建（やまとたける）を日本武（やまとたける）に名を変えています。東征の北の折り返し点である、陸奥湾を望む東北町の峠に「日本真中」の碑を残していました。日本国の国名認識が富士山に由来することを、残すため鶴岡市に「日本国」という山名の山を残しています。そして富士山との間に日本平山も残しました。極め付きはその認識が日本武尊自身であることを記録する作業を、帰還の経路で行いました。認識を残す方法など簡単には思いつかないが、大変な経路でそれを行ったのです。

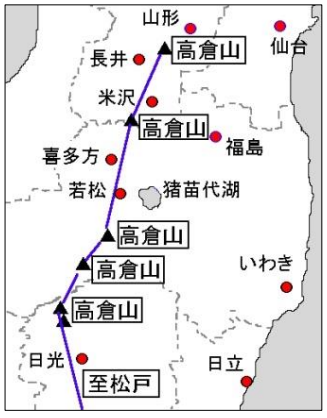

図 11　大伴武日の経路

図 10 は尾張までの帰還経路を点線で表しています。新潟から会津に向かい、八溝山・筑波山を経て松戸では置賜で分かれた大伴武日と合流します。大伴武日は図 11 のように、置賜からは米沢、南会津、日光と山中突き切って松戸に向かっています。

松戸から船で上野に上陸し、大磯に立ち寄って富士山に向かいました。富士山を今一度見たいとの思いです。富士山から日本国山に引いた直線に従って秩父を経て群馬に向かっています。富士山では年齢が近い副将軍の建稲種とは仲が良く、ともに巡ったと伝わります。群馬では日本国から引いた直線上の武尊山に登って日本国の認識が日本武尊自身であることを記録しました。

帰還の途上新潟県の村上市岩船付近から、佐渡に渡っています。その後、建稲種は船で帰還することになりますが、日本武尊隊が利根川を渡る支援までに時間があることから、北海道に渡り小樽付近まで行った足跡を残しています。図 12 です。

日本武尊が認識した富士山から日本国への直線を、さらに石倉山で延長し小樽の神威古潭(かむいこたん)付近の石倉山を頂点とする矢印の地上絵を残したのです。石倉山は八甲田山や岩木山などの山中に見つかります。

日本武尊東征隊が北海道に渡っていた確かな足跡です。

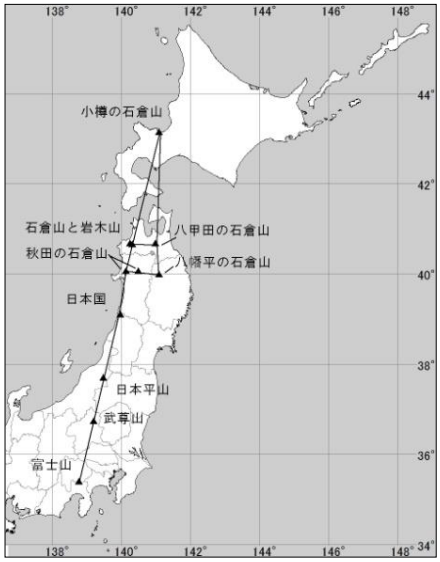

図 12　北を目指す地上絵

この先の帰還の経路では悲劇が続きました。

日本武尊は武尊山からの戻りの道を、今一度富士山が見たいと北杜市に下りてきています。三度富士山を見たことになります。今も残る神代桜を植え伊那谷、神坂峠を経て尾張に戻りました。多治見から春日井に下りる内津峠までやってくると早馬がやってきて、副将軍の建稲種が駿河沖で溺れて亡くなった知らせが届きます。富士山を巡った後、二人は別れ建稲種は船で帰還の途中でした。御蔵島沖で珍しい鳥を見つけ、尊に献上しようと考え捕獲中に溺れて亡くなったということです。日本武尊はこれを聞き「うつつか！」と嘆き悲しみ、そこに内津神社を建て建稲種を祀りました。往路の立ち寄りの際、帰還での冬は建稲種の妹の美夜受比売(みやずひめ)の下で過ごす約束をしていたが、比売とは悲しい再会となりました。

翌春、近江経由帰還の計画で関ケ原を経て伊吹山に向かいました。関が原では北陸に遠征した吉備武彦と合流しています。湖北の余呉あたりまで進み引き返すとき、伊吹山の麓で賊の待ち伏せに遇い戦いとなり、毒矢が日本武尊の脚に当りました。気を失った日本武尊を担ぎ近くの岩倉山を越えた麓の泉で気を戻します。賊を倒し予定の帰路、湖南に向かいましたが米原の醒ヶ井(さめがい)まで来て、二度目の泉の水で生気を戻し帰路の方角を

変更しました。

毒矢の毒がトリカブトであるため、余命いくばくもないことを悟り三重経由の帰路にしたのです。養老までやってくると「今吾が足得歩まず、たぎたぎしくなりぬ。」と、歩行も困難になりました。四日市の杖衝坂では脚の傷から血が流れ、洗ってまた歩いたといいます。

図 13　最後の経路

「吾が足は三重の勾(まがり)の如くして甚(いと)疲れたり」と述べたとあります。三重県の名の由来です。

少し進んで亀山の集落が遠くに見えてきたところで、病は進み亡くなります。この亀山は東京湾渡海の嵐で亡くなった弟橘媛の生まれ里でした。大和まで何とか帰りたいと思ったが遠くかなわず、次の目標を媛の生まれ里に置いたが、わずかにその景色を見て力尽きたのでしょう。

亡くなる前いくつかの歌を詠んでいるが、ともに長い旅をした兵たちに次のように諭っています。

「命の　全(また)けむ人は　畳薦(たたみこも)　平群(へぐり)の山の　　熊白樫が葉を　髻華(うず)に挿せ　その子」

元気に帰れる人は、平群の山の白樫の葉をかざして喜んでほしいと。遺体は近くの能褒野(のぼの)の白鳥塚に葬られました。画像です。

私がこの「たかとり山は東征のベクトル」であること知ったのは、2008 年 3 月のなかばでした。尊は記紀に記されていた以上に、東国の果てまでも歩いたことを知ったのです。千数百年もの長い年月の後、今やっと知ることができましたと、尊に報告するための西への旅を決意しました。熱田神宮で報告し、さらに白鳥塚のある加佐登神社に向かいました。神前でこの発見を報告し境内を散策する中、尊の命日が 4 月 8 日である掲示を見て、身の震える感動を覚えました。

4 月 8 日は石神台の石の上を太陽が通過する日で、走水の海を渡る日と決めて船出し、突然の嵐に弟橘媛が身を投げて、尊を救った日だったのです。

なんということか、尊はこの海難の日を覚えていて、死を覚悟しながら何としても亀山まではと彷徨を続けていたのではないでしょうか。そしてその日が来て、急に病は進みました。

弟橘媛と同じ日に桜の花の下に死のうと決めていたのです。何度も「吾妻はや」と叫び続けた弟橘媛を心から愛していたのです。人は最後の数日を気力で左右できるものです。愛の証をこんな形で残したなんて、この感動を表す言葉も無く、一人桜残る塚を巡りました。　　おわり